

鶴岡高専の試みに注目す

先月、山形県鶴岡市と香川県高松市において文部科学省主催の全国高専教員研究会が開催され、「科学にとっての国語力とは」という基調講演を行った。この集会に出て、現在、高専(高等工業専門学校)が抱えている国語教育にかかわる課題を認識することができた。

それは全国高専での本年度の研究課題としても取り組みが行われた「技術者における国語教育はどうあるべきか」という課題である。現在、小中高等学校で行われている国語教育は、人間の感性的能力を高める文芸教育に偏重しており、理科や技術のリポートを書く、仕事における企画書や調査報告書などを書く、あるいは他の人々と議論するなどの論述能力を高める教育が少ない。

この問題点は、高専では明白な形で現れる。なぜなら、高専卒業生たちは専門的なエンジニアとしての技術を有しているが、論述力が十分でなく、せっかくの技術力を存分に活用できない状況が生まれ

ている。近年、四年制の大学の理工学部でも論述能力の不足は大きな問題であるが、教育期間が二年少ない高専ではその問題はさらに深刻である。

技術者育成に求めたい論述教育

こうした状況を踏まえ、その研究集会では私は論述教育の必要性を述べ、各高専から国語教育の問題点とその改善方法について討議があった。

特に、論述教育に取り組んだ鶴岡高専の実践は今後の国語教育のひとつのモデルと考えられる。

そこでは、感性コミュニケーションシヨンの教育をするにあたって、本来言語を持つ論理的側面を理解しなければ、結局は生徒たちに何も伝わっていないのではないかとという危機感から、手紙の書き方や履歴書の書き方に始まって、討議資料の作成や最終的な口頭発表の方法に至るまで、きめ細かく国語教育に組み込み、生徒たちから国語の苦手意識

がなくなったという。

文芸中心主義の国語教育

これに対して、日本の近代文学や古典文学、あるいは漢文の素養などをつけることも人間の教養として重要であ

り、国語という科目に与えられた時間数の中で論述を重点化するのではなく、むしろ「日本語」という科目を新設すべきだ、という意見も出た。

でやもすれば多くなりがちであった文芸教育の比重を下げ、論述教育とバランスをとることが重要だろう。これは近代文学や古典文学を専門としてきた国語教員にとっては辛いことかもしれない

論 正



同志社大学工学部教授 三木 光範

り、国語という科目に与えられた時間数の中で論述を重点化するのではなく、むしろ「日本語」という科目を新設すべきだ、という意見も出た。

しかし、新しい科目の新設は他の専門科目とのバランスから容易でなく、最終的には全体を見直して何を残すのかという議論とともに、これまで

いが、自分の過去の資産をそのまま活かして生きてゆけるほど社会は甘くないことを肝に銘じて、新しいチャレンジを楽しんでほしい。

多くの学生にとって古典文学や漢文の教養はすぐには役に立たないことは明白である。十分な専門技術と論述能力を持って目の前の就職試験に合格しない限り、ゆたかな教養

である。 「職業人である前に人間であれ、お金になるスキルより自分を高める教養が重要だ」という意見を持つ人はすでに「お金になるスキルで衣食足りている人」である。あなたは家の修理に来た大工さんに「家の修理は下手でもいいから、文学の話しよう」と言うのだろうか。

専門教育だけでは人間が完成しないという意見は妥当である。正しい価値観を持った良き市民としての人間になるための教育は、高専でも大学でもきわめて重要である。しかし、それは文芸教育をやれば済むというものではなく、全教員が全科目で少しずつ担当すべきものだと考える。

意図伝えられずば知識も活きず

全教科に必要な人間教育 各教員が自分の科目で専門知識の切り売りだけに終始するのではなく、学問への態度や姿勢を教え、授業中の私語や居眠りなどに対する叱責をきちんと行い、提出されたリポートや定期試験の評価を正しく行い、また学生たちにフィードバックすること、あるいは学生からの評価を受けて、自分の講義を改善するなど、一連の教育的配慮そのものすべてが極めて重要な人間教育であると考えられる。

その意味で、高専や大学の教員はあくまで当該専門分野の専門家であるとともに、教育の専門家でもなければならぬ。

(みき みつひり)